

「トムカスが家族になった日」

雨が降っていた。夜の廃都。崩れた高層建築の間を、一人の少年が歩いている。黒髪。使い込まれた長剣。傷だらけの身体。そして——誰も寄せつけようとしな目。その少年の名は、

トムカス。

当時の彼には、仲間はいなかった。必要とも思っていなかった。誰かと組めば、判断が鈍る。誰かを守ろうとすれば、剣が遅れる。信じれば、失った時に苦しむ。だったら最初から一人でいい。それがトムカスの生き方だった。

この日までは。

第一章「孤独な剣士」

「ヨル、この先です」



まふいが足を止める。ヨルファミリアは、とある異常な戦闘反応を追って廃都へ来ていた。ヨル。まふい。そしてレモン。三人が辿り着いた先には——数十体の敵が倒れていた。レモンが周囲を見る。

「……これ、一人でやったの？」

「おそらく」

まふいが答える。壁には深い斬撃痕。地面には幾重もの斬撃痕。そして、その中心。一人の少年が立っていた。長剣から雨水が滴っている。ヨルが声をかける。

「あなたがやったの？」

少年が振り返る。

「だったら？」

レモンが小声で呟く。

「感じ悪っ」

「聞こえてるぞ」



「聞こえるように言った」

「……………」

初対面から最悪だった。ヨルだけは気にせず近づく。

「名前は？」

「答える必要あるか？」

「私はヨル」

「聞いてない」

「この子がまふい」

「紹介する必要もない」

「こっちがレモン」

「だから——」

レモンが笑顔で手を振る。

「よろしく、感じ悪い人」



「お前とは絶対よろしくない」

後に互いを意識しまくる二人の、記念すべき最初の会話だった。

第二章「一人で戦う少年」

ヨルたちの目的とトムカスの目的は同じだった。廃都地下に潜伏する敵対勢力の排除。

「だったら一緒に行こうよ」

ヨルが提案する。

「断る」

即答。

「早いなあ」

「一人で十分だ」

まふいが静かにトムカスを見る。



「ヨルの提案を断るのですか？」

「まふい」

「はい」

「圧かけない」

「圧など」

「出てる出てる」

トムカスは長剣を肩へ担ぐ。

「俺は俺でやる。お前らは好きにしろ」

そのまま歩いていく。レモンがムツとする。

「何あいつ」

「面白いね」

ヨルが笑う。

「ヨル、ああいうタイプ好きだよね……」



「だって絶対何か隠してるじゃん」

そしてヨルは、

「追おっか」

「やっぱり」

三人はトムカスを追った。

地下施設。トムカスは本当に強かった。長剣による正面突破。敵の攻撃を最小限の動きで回避し、一撃で仕留める。無駄がない。迷いもない。何より——一人で戦うことに慣れすぎている。レモンが後ろから見ていた。

「……強い」

まふいも分析する。

「単独戦闘能力はかなり高いですね」

ヨルは別のところを見ていた。



「でも危ない」

「え？」

「全部、自分でやろうとしてる」

その直後だった。敵の攻撃。トムカスは回避。続けて二撃目。防御。三撃目。反撃。だが——死角から四撃目。

「トムカス！」

レモンが飛び込んだ。ガキィン！！攻撃を弾く。

「っ！」

トムカスが振り返る。レモンが隣へ着地。

「危なかったね」

「……余計なことするな」

「は？」

「避けられた」

「どう見ても無理だったでしょ！」



「避けられた」

「頑固！」

「うるさい！」

「助けてもらったらありがとうございますよ！」

「頼んでない！」

「ほんとと感じ悪い！！」

敵のど真ん中で喧嘩が始まった。ヨル。

「仲良くなれそう」

まふい。

「私にはその根拠が理解できません」



第三章「守るということ」

地下最深部。そこには予想を超える敵戦力が待ち構えていた。
包囲。退路封鎖。トムカスが剣を構える。

「俺が正面を突破する」

レモンが隣へ並ぶ。

「私も行く」

「いない」

「またそれ？」

「足手まといだ」

「……今なんて？」

レモンの額に青筋。ヨルが慌てる。

「レモン、今は敵！ トムカス殴るの後！」

「後ならいいんだ……」



戦闘開始。敵の数が多い。ヨルたちなら突破できる。だが、問題は施設そのものだった。警報。

『自爆装置起動』

ヨルが顔を上げる。

「まずい」

出口まで遠い。その時、崩落。巨大な瓦礫が落ちる。レモンの退路が塞がれた。

「レモン！」

ヨルが叫ぶ。

「私は大丈夫！ 先に——」

その瞬間、トムカスが方向転換した。出口とは逆。レモンの方へ走る。

「トムカス！？」

「動くな！」



長剣を振り抜く。ズガァァン！！瓦礫を切断。しかし、天井がさらに崩れる。トムカスは迷わなかった。レモンを抱えて飛ぶ。直後、背後が完全に崩落した。

「……………」

レモンがトムカスを見る。

「……なんで戻ってきたの？」

「知らん」

「知らんって」

「身体が勝手に動いた」

「……………」

「勘違いするなよ」

「何を？」

「お前だから助けたわけじゃない」

レモンが少し笑う。



「私、何も言ってないけど？」

「……………」

「もしかして照れてる？」

「置いていくぞ」

「ちょっと！」

その様子を遠くから見ていたヨル。ニヤッ。まふいが横を見る。

「ヨル。何か企んでいますね」

「いや？」

「その顔は企んでいます」

第四章「お前、一人じゃない方が強いよ」

施設脱出後。雨は止んでいた。トムカスは立ち去ろうとする。



「じゃあな」

ヨルが呼び止めた。

「トムカス」

「何だ」

「ヨルファミリアに入らない？」

トムカスの足が止まる。

「……は？」

レモンも驚く。

「ヨル、本気？」

「本気」

トムカスは鼻で笑った。

「断る」

「だと思った」



「なら聞くな」

「でもさ」

ヨルが続ける。

「お前、一人じゃない方が強いよ」

「……………」

トムカスの表情が変わった。

「俺が弱いって言いたいのか？」

「逆」

ヨルはトムカスを見る。

「めちゃくちゃ強い」

「だったら——」

「でも、一人で戦うことにこだわりすぎてる」

トムカスは黙る。



「今日だってレモンを助けたでしょ」

「それは——」

「一人で戦う方が強いなら、助けに戻る必要なかったよね？」

「……………」

「誰かを守ると弱くなるって思ってる？」

トムカスの目が僅かに揺れる。凶星だった。ヨルは笑う。

「私は逆だと思う」

そして——

「守りたい人がいる方が、強くなれるよ」

沈黙。トムカスは答えなかった。

第五章「入団試験」

翌日。ヨルファミリア本部。



「……なんで俺はここにいるんだ」

トムカスが呟く。ヨルが笑顔で答える。

「入団試験」

「俺は見学に来ただけだ」

「はいはい」

「聞け」

試験内容は模擬戦。相手は——まふい。

「よろしくお願いします」

「……………」

トムカスがヨルを見る。

「殺す気か？」

「まふい、ちゃんと手加減してね」

「ヨルの命令であれば」



「余計怖いんだが」

開始。トムカスが踏み込む。速い。長剣とまふいの武器が激突する。一撃。二撃。三撃。トムカスは食らいつく。だが、まふいは強い。次第に押される。そして——ドンッ！！トムカスが地面へ叩きつけられた。

「……っ」

「終了しますか？」

まふいが尋ねる。

「まだだ」

立ち上がる。再び挑む。倒される。また立つ。三度。四度。五度。見ていたレモンが呟く。

「……馬鹿」

ヨルが笑う。

「でも嫌いじゃないでしょ？」



「は！？」

「何でもない」

最後。トムカスは全力で踏み込んだ。まふいが迎撃する。その瞬間、トムカスの狙いは——まふいではなかった。剣先が地面へ剣圧。視界を遮る。そして死角から一撃。まふいの髪が僅かに揺れた。剣は届かなかった。

しかし、まふいが一歩だけ後退していた。静寂。トムカスは膝をつく。

「……どうだ」

まふいがヨルを見る。ヨルは笑った。

「合格」

第六章「第4席」

正式加入の日。トムカスには席が与えられた。



第4席。

「第4席か」

トムカス本人が一番驚いていた。ヨルは平然としている。

「うん。レモンの次に加わったから」

「そんな決め方でいいのか？」

「席は強さの順位じゃないよ。加入した順に近い番号だから」

まふいが静かに告げる。

「ヨルが決めたことです」

「その理屈万能だな」

そして、少し離れた場所からレモンがやって来る。

「はい」

何かを差し出す。

「何だ？」



「入団祝い」

「俺に？」

「いないなら返して」

トムカスが受け取る。小さな剣用の手入れ道具だった。

「昨日見たら剣ボロボロだったから」

「……………」

「ちゃんと整備しなよ」

「……ありがとな」

レモンが止まる。

「え？」

「何だよ」

「今、ありがとうって言った？」

「言ってない」



「言った！」

「言っていない」

「昨日は助けてもありがとうと言わなかったのに！」

「うるさい」

レモンが笑う。

「ちょっとは素直になったじゃん」

「……お前、本当に面倒くさいな」

そう言いながら、トムカスは手入れ道具を大切にしまった。ヨルはその光景を見ていた。そして思う。——やっぱり。一人じゃない方が強い。

最終章「ただのトムカス」

夜。歓迎会が終わったあとトムカスは一人、中庭回廊にいた。隣に誰かが来る。ヨルだった。



「まだ帰らないの？」

「……帰るって、どこに？」

ヨルがトムカスを見る。トムカス自身も、その言葉を口にしてから気づいた。今まで、帰る場所なんて考えたことがなかった。眠れればどこでもいい。戦えればそれでいい。明日生きていけば十分。そんな生活だった。

ヨルが本部を指差す。

「ここ」

「……………」

「今日からここが帰る場所でしょ」

トムカスは建物を見る。中から声が聞こえる。レモンが何か騒いでいる。まふいがヨルを探している。いつものヨルファミリア。まだトムカスにとっては、“いつもの”ではない光景。でも、いつか。そうなるのかもしれない。

「……悪くないかもな」



「でしょ？」

ヨルが笑う。トムカスもほんの少し笑った。この日。孤独な剣士は、ヨルファミリア第4席となった。やがて仲間と戦い、仲間を守り、何度も限界を超え、そしていつの日か——過去すら乗り越えるほどの男になる。

ただ一人の、トムカスとして。

そして——翌朝。大食堂。レモンがトムカスの隣へ座った。

「おはよ」

「……なんで隣なんだよ」

「空いてたから」

反対側も普通に空いている。

「……………」

「何？」

「別に」



レモンがトムカスの朝食を見る。

「あ、それ美味しそう。一個ちょうだい」

「嫌だ」

「一個くらいいいじゃん」

「自分の食べ」

「ケチ」

「お前なあ……」

向かい側ではヨルがニヤニヤしている。

「何だよヨル」

「いやあ？」

「その顔やめろ」

「別に何も？」

まふいがヨルの隣からトムカスを見る。

「ヨルを睨まないでください」

「睨んでねえよ！」

「トムカス、これもらうね」

「おいレモン！ 勝手に取るな！」

「いただきまーす」

「人の話聞け！！」

騒がしい朝だった。一人だった頃なら、絶対にあり得なかった朝。トムカスはまだ知らない。この騒がしさが、いつか自分にとって――

命を懸けて守りたい日常になることを。

そしてレモンとの、この小さな言い争いがずっと先まで続く、二人の物語の始まりだった。

